

支援者としての葛藤

～多様な立場から「はたらくことの支援」を考える～

発表者

社会福祉法人みどりの樹

齋藤麻子

NPO 法人地域生活応援団あくしす

堀米美紀

1、はじめに（今テーマの趣旨）

昨年度、就労支援部会では所属法人の次代を担う立場の3名の職員が、障がいのある方たちの『はたらく』ことを支える中で何を大切にしていくのかを、所属法人の成り立ちや理念を通して振り返り、自身の根幹となる信念や誇りを再確認しました。

私たちは日々の業務の中で、揺るぎない信念を持つ一方で、常に直面する課題や制度との間で葛藤し、答えを見失うことも多いのが現実です。昨年度の3名のように、私たちには原点に立ち返り、思いを共感し、それを次の支援へと体现するための「答え合わせの場」が必要であると整理しました。

作業所連合会がその「場」を求める職員たちの受け皿となるため、今年度この就労支援部会においては、「生活介護事業所で『はたらく』ことを支援する意義に悩む若手職員」と、「A型事業所だからできる『はたらく』ことへの支援の誇りと価値に悩む中堅職員」からの話題提供をもとに、障がいのある方の『はたらく』をその後の全体討議で深掘りしていきます。

事業形態に違いはあっても障がいのある方たちにとって『はたらく』ことは生活の中心であり、社会との接点であることに違いはありません。必ずしも答え合わせに正解があるわけではないですが、日々葛藤しながら働く職員にとって、現状を見つめなおし、課題を浮き彫りにし、自らの言葉で外部に提言する過程にこそ意義があり、そのこ

とが個々の支援の質の向上につながるとともに、所属法人全体の価値を高めていくと考えます。

2、課題提起

① 生活介護事業所で「はたらくことの支援」をする意義を考える

作業中にトイレに行き、そのままトイレにこもってしまうようになったAさん。聴覚障がいと知的障がいがあり、発語はありません。普段は簡単な手話や指文字等を使ってコミュニケーションを取っています。

職員間の話し合いでは、Aさんは、「作業をしたくないのか?」「作業室の環境が嫌なのか?」「作業に入ればできることがたくさんあるが、本人の想いを尊重して作業を続けなくてもいいのでは?」等と、色々な意見が上がりました。

私自身も、「そもそもAさんは『はたらくきたい』と思っているのだろうか?」「保護者や職員の想いを押し付けていないだろうか?」と考えるようになりました。そのことから、Aさんのことをもっと知りたい、理解を深めたいと思うと同時に、障がいをもつ方の『はたらく』ことについて幅広い考え方を収集したい、と思いました。

私が勤めている事業所は生活介護ですが、「作業」が活動の中心になっています。どうして『はたらく』ことに重きを置くこと

にしたのかを理解するため、まつぼっくりの成り立ちや経緯を改めて深く知ろうと思いました。そこから、『はたらく』ことの価値や意義について自分なりに深めたいと考えました。

今学会の機会を通して、自分の中にある葛藤を整理して発信することで、今後に向けて具体的な取り組みにつなげていきたいと思えます。そして、様々な方のお考えもお聞きし、「生活介護事業所で『はたらく』ことの意義」について自分なりの言語化を実現していきたいと思えます。

② 就労継続支援 A 型だからできる「はたらくことの支援」を考える

前年度も、この分科会の機会に話題提供をさせていただきました。その際には、一般就労と就労継続支援 A 型のサービスとの差別化やそれぞれが担う価値などが曖昧になりつつある自分や、A 型事業所としての役割への悩みを発信しました。様々な法制度や世の中の状況は目まぐるしく変化していきます。一方で事業所として、支援者としての「思い」の根幹は変わらない・変えてはならない部分があります。発表をさせていただくことで、またその準備を進めていく中で、そういった狭間とひずみを再認識することができました。その当時、時代に柔軟に対応していきながら、自分たちの信念をブレずに活動してこられた先人たちのように、「今」を担う私たちも変わりゆく状況の中で、すべきことを見出していくことが必要なのだという点に気づきました。

そういったことも踏まえて、今年度は全 A ネット（就労継続支援 A 型事業所全国協議会）の研修へ参加し、A 型事業所としての現状や、利用者・支援者・運営および経営…それぞれの立場が抱く思いはどこにあるのか、様々な事業所の話を聞き、現状を見つめなおす機会づくりを行いました。

本分科会では、その中で見えてきたもの

や自分自身の新たな葛藤などを発信するとともに、A 型事業所としての現状や、一般就労との差別化だけではなく、就労継続 B 型事業とも相まみえる部分にも焦点を当てて、現行の福祉制度そのものへの疑問や、違和感を「葛藤」という形で発信し、みんなで考える機会にしたいと思えます。